

時刻	次第・発言者	発言内容
13:30	＜開会行事＞ 進行(馬場総括) ＜開会挨拶＞ 森山課長	開会の言葉 令和4年度第4回「地域連携コンソーシアム会議」の開会にあたり、一言ご挨拶申し上げます。委員の皆さまにはご多用のところ本会議にご出席いただき、ありがとうございます。 早いもので、令和4年度が終わろうとしています。本年度より新規に立ち上げた「生涯を通じた障がい者の学び支援事業」の実施にあたっては、コンソーシアム委員のみなさまの御支援・御協力のおかげで予定していた活動を行うことができました。ありがとうございました。 事業成果を、先日2月4日に実施した「ともに学び、生きる共生社会コンファレンス～おおいたでかたろうえ！～」にて発表いたしました。委員の皆様にもご参加いただき、ありがとうございました。後ほど報告いたしますが、県内外の先進事例の発表や衛藤先生のご講演、シンポジウムにより、本事業のよりいっそうの推進に向けた機運を高めることができたのではないかと考えております。 本年度は、香々地・九重青少年の家や、大分大学、豊後大野市千歳公民館で初の障がいのある方を対象にしたプログラムを実施したものの、まだまだ県内に普及しているとは言えない状況です。最終的な目標は、障がいのあるなしにかかわらず、ともに学ぶことのできるプログラムが県内で広く実施されることですが、そのために今は障がいがある方の学びの場をつくっていくことが重要だと考えます。 本会議では、今年度の事業内容と成果および課題を報告し、来年度の方向性を提案させていただきます。 その後、テーマ「大分の“障がい者の生涯学習”を持続可能な取り組みにするために必要なこと」について3つのグループに分かれてご協議をいただく予定です。どうぞ本事業の推進・発展のために委員の皆様のお知恵をいただきますよう、お願い申し上げます。 短い時間ではありますが、委員の皆様には、本事業の推進のため、忌憚のないご意見をいただきますようお願い申し上げまして開会の挨拶といたします。
13:40	＜参加者紹介＞ ＜座長選出＞ 進行：岡田座長 ＜事業実施状況＞ 社会教育課 (首藤)	参加者紹介 紙面にて紹介 —協議— 座長 岡田教授 副座長 森山課長(第1回と同じ)
13:55	関委員	(1) 報告 実施内容と成果について ＜省略＞ ※別添資料参照 (意見) 福祉の立場から参加して、非常に気づきや学びが多かった。人材育成は我々も課題であるが、福祉人材は地域にたくさんいる。障がい者スポーツ指導員など。ぜひ社会教育だけでなく福祉の人材も活用してもらいたい。今後も連携していきたい。公民館で(講座が)できるというのは我々にとっても

		長年の悲願であったので、ぜひ大分から全国に広げていって当事者にとって満足度が高い取り組みを行っていききたい。
	岡田座長	（意見）私たち教育の人間は、福祉の分野でたくさんのプログラムや指導員がいるということが新しい発見、気づきであった。情報をつないでいってご一緒できないかとか障害のある方だけに向けてスタートしたプログラムだが、最後はインクルージョンに学べるプログラムをつくっていくうえでたくさんの課題が見つかった。
	麻生委員	（意見）公民館利用に関して。昨日ダンスの指導をしていたら、ほかの団体から冷たい対応をされた。一生懸命やっているということに対して非常に無関心であることを感じた。障がい者の活動を取り囲む人たちの対応が変わらないと社会の中に浸透していかない。啓発活動をする必要がある。
	岡田座長	（まとめ）実際現場で活動していると差別的な言動にふれることがあるだろうので、研修していく必要がある。また先ほどの報告の中のアンケート結果のところで、「なんとなくわからないから実現できていない」という部分もたくさんある。わからないから二の足を踏んでいるという状況がある。
	高窪委員	（意見）昨日相談に来た60代の方が「友達がほしい」と。40代のころにいろんなところに出ていったけど「友達をつくりたい」というものと全然違ったとのこと。行ったときに入っていきやすいつくり、「居場所」という場所が地域にあったらいいな、と思う。漠然と友達がほしい、話がしたい、という思いに答えるような場が将来的にできていくとよい。
	岡田座長	（まとめ）「〇〇を学ぼう」だけではなく「友達になろう」というような、活動にフォーカスしたようなものがあったてもよい。初めて参加するときは心理的負担があるだろうので、十分に慣れる機会をつくっていくことが大事だ。
	池辺委員	（意見）報告書の中で、P8の「どのような生涯学習活動があると良いと思いますか」というところで、ご家族の方や支援者の方が「社会生活に必要なこと」と答えている。社会リハビリテーションの場が足りていないのだろう。障害福祉の事業でいうと「自立訓練事業」がそれに当たる。県内でやっているところは数少ない。電車の乗り方、銀行での通帳の作り方など、そういった部分のスキルを特に知的障害の方が学ぶ機会は少ない。就労訓練はお仕事をしていてそういうスキルを身に着けることはしていないので非常に課題は多いと感じた。 「親亡き後」をどうするかという課題をとってみても、障がいをもったお子さんが今後生きていくために必要な経験をする場というのは間違いなく必要とされているという印象だ。今後の課題のところで、当事者に情報を伝えることと並行して指導できる人をつくっていかないと到底無理だと感じた。施設の職員の方に助けられることが多かったというのは、障がいの特性であるとかその方ご自身の特性を理解している方がスタッフとして入っていただけるとうまくいく。香々地では今回ものづくりをしたということだが、支援者（職員）がものづくりを教えられるかということとそれもまた難しい。公民館等で今指導していらっしゃる方々に障がい者のことを理解してもらうかということと並行してすすめると良いのではないか。教えるスキルは公民館がもっているけれど、障がいのことについては不足しているのであればそこをこれから補っていけるとよいと思った。最近「DE T研修」という面白い取り組みを聞いた。当事者になっ

	岡田座長 五反田委員	たつもりで研修を受けることができるので、公民館の職員や指導者にそういう研修を受けてもらって、どんどん障害があるかたを巻き込みませんか？という指導をしていくのもよいと思う。仲介したり途中のフォローをしたりできるようなコンサルタントがいるとよい。受け入れる体制や運営方法を相談しながら講座を展開できると良いのかなと思った。必要性は高いと思っているので来年何か一つでも実効的な仕掛けができればよい。 （まとめ）学習内容に関する専門家も必要だけれども、障がいの特性というのも理解していて受講支援できるような人も必要だということ。 （意見）先ほどのDE T研修だが、「障がい平等研修」と言われるもので、簡単に言うと「障がいってどこにあるのか」ということを考える。視点を変えるきっかけになる研修。車いす＝何かしてあげなければならない、ではなく、その人が何を手伝ってほしいのか、という気づきを考えていく機会になるので、障がい当事者の方々やそれに係わる方に多く受けてもらいたい。まずは自分たちが学ぶ機会として参加して行って、多くの方々に広めていく機会が来年度できないかと思っている。 また、今年度参加してみて、障がい当事者が学びの機会を得て外に出ていったとしても周囲の理解がなくてあきらめてしまうのではないかということ为先ほどの麻生さんの話を聞いていて思った。周囲の理解がある社会にしていけないと共生社会はすすんでいかない。理解がどうやって進むのかと自分なりに考えると、小さいころから関わる機会が必要になるのではないかと思う。 （まとめ）学習機会を障がいがある人に提供するだけでなく、考え方や視点を学ぶ機会というのも併せて整備していく必要がある。 （意見）障がいのある方たちが活動できる場所を新たに作るのではなくて、本来あるところに一緒にいけばいいのに、なぜそれができないのかと考えた。なかなか難しい。一緒の場だとできない人もいる。その理由として、行ったけどできない、いやな思いをして帰るといったことがある。それをなくすためには、障がいってどういうことなのかをきちんと理解してもらい取り組みをするとうよい。うちは小学校にアウトリーチして障がいがある方を講師としたプログラムをしている。障がいがあろうとなかろうと誰もが素晴らしい力をもって取り組みをすすめているんだということを理解してもらうためには何度やってもすすまないかもしれないけど何もやらなかったら変わらない、だからちょっとずつでもよいのですすめていかないといけないという話を職員とした。今ここでやっていることは無駄ではなく、壁にぶつかって試行錯誤しながらやっていくべきだと思っている。公民館に努力をしろということではなくて、公民館が「ここは助けてほしい」ということを共有して、できる人がそこを手伝って行って、という事例を積み重ねていくことが大切。その手伝いができるようなことがあれば、センターとして取り組んでいきたい。 （まとめ）今から新しく特別に作るのではなくて、今ある場所を障がいのあるなしにかかわらずできる場所にする必要があるということ自体は総論としては賛成。具体的なやり方として運営側にどういう知識や準備が必要か、参加する側にどのようなことが求められるかということ具体的に明らかにして、「こんなふうにするとできますよ」ということを具体的に示していく必要があるの
	岡田座長 横山委員	（まとめ）学習機会を障がいがある人に提供するだけでなく、考え方や視点を学ぶ機会というのも併せて整備していく必要がある。 （意見）障がいのある方たちが活動できる場所を新たに作るのではなくて、本来あるところに一緒にいけばいいのに、なぜそれができないのかと考えた。なかなか難しい。一緒の場だとできない人もいる。その理由として、行ったけどできない、いやな思いをして帰るといったことがある。それをなくすためには、障がいってどういうことなのかをきちんと理解してもらい取り組みをするとうよい。うちは小学校にアウトリーチして障がいがある方を講師としたプログラムをしている。障がいがあろうとなかろうと誰もが素晴らしい力をもって取り組みをすすめているんだということを理解してもらうためには何度やってもすすまないかもしれないけど何もやらなかったら変わらない、だからちょっとずつでもよいのですすめていかないといけないという話を職員とした。今ここでやっていることは無駄ではなく、壁にぶつかって試行錯誤しながらやっていくべきだと思っている。公民館に努力をしろということではなくて、公民館が「ここは助けてほしい」ということを共有して、できる人がそこを手伝って行って、という事例を積み重ねていくことが大切。その手伝いができるようなことがあれば、センターとして取り組んでいきたい。 （まとめ）今から新しく特別に作るのではなくて、今ある場所を障がいのあるなしにかかわらずできる場所にする必要があるということ自体は総論としては賛成。具体的なやり方として運営側にどういう知識や準備が必要か、参加する側にどのようなことが求められるかということ具体的に明らかにして、「こんなふうにするとできますよ」ということを具体的に示していく必要があるの
	岡田座長	（まとめ）今から新しく特別に作るのではなくて、今ある場所を障がいのあるなしにかかわらずできる場所にする必要があるということ自体は総論としては賛成。具体的なやり方として運営側にどういう知識や準備が必要か、参加する側にどのようなことが求められるかということ具体的に明らかにして、「こんなふうにするとできますよ」ということを具体的に示していく必要があるの

14:30	神田委員	で、このあたりも2、3年目に向けた課題として挙げておきたい。 （質問）大分県精神保健福祉会の神田です。公民館が今年やったのは、障害者の方を集めて何かする、という活動だった。実際、私たちが何か学びたいと思ったら公民館の講座に参加するというのが身近である。ただ実際続かないことも多い。今後の必要とされることの中に「障がいの有無にかかわらず参加できる講座」を公民館に求めていくのか、障がいがある人たちだけを集めて教室を開いていただけるのか、どちらの方向か。
	社会教育課 （首藤）	（回答）豊後大野市千歳公民館の考え方としては、今公民館でやっている講座に障害のある方を入れるのではなくて、新たに講座を設けて、障がいのある方がどのような学びのニーズをもっているのかということ聞き取ることから始めた。講師の方として地域の方に来てもらったり、支援者として地元の人に参加してもらうことで「一緒に学ぶ」ことをやっている。受講者としては障害のある方をターゲットにしているが、講師や支援者は障害のあるなしにかかわらず参加していただき、それを少しずつ広げたいというビジョンを持っている。
	神田委員	（意見）最近地域のスポーツクラブで障がいのある方を受け入れて一緒にやってくれないかという方向に話があるようだが、実際にはなかなか実行できていない。私たち家族として思うのは、地域に学ぶところがあるのであれば、そういうところで分け隔てなく参加したいときに参加できる扱いであってほしい。目指すところはそこであってほしい。
	岡田座長	これまでの「ゴールは一緒」というプログラムではなく、一人ひとり違うプログラムにするために指導者側の学びも必要。参加者の障がい者理解も重要。最終的なインクルージョンのゴールまでにいくつかのステップを3年間で具体的に作っていけるとよい。
	衛藤委員	（意見）大分大学、公民館の事業は知的障がいがある方に限定している。知的障がいの学校教育における定義は①知的な発達に遅れがあること。これに対応するには内容をどれくらいの程度に合わせていくかが参加のしやすさに関係する。また、「何を」に加えて「どのように」教えるのかという2つが対応の中で考えていかなければならない。②意思疎通に困難がある。コミュニケーションが難しい。教えるときにどのように支援していくのがとても大事。大分大学の男子バスケットボール部が県の知的障がいのある方たちの代表チームの練習相手をした。その時、事前に部員の学生に言ったことは「暴言的な発言は彼らの表現の不足によるものだから気にしないように」と何度も言った。逆にやっていてスムーズになったのは、ハイタッチを取り入れたことによる。「誤解」と「方法」というのはもっと試行錯誤の中で知見を積み重ねていく必要がある。③適応行動の困難。買い物や電話、スマホのスキルなど。千歳公民館のスマホ教室が近い。ドローンなど新しい体験をする場に出かけていく機会も障がいのある子たちは少ないので、体験がないと興味が起こってこないで体験は必要。2つの青少年の家でやっていた講座は施設でいつも一緒にいるメンバーだから安定感があった。千歳公民館はそうではなかったので、交流は機会を重ねていかないと、そのことへの対応は結構大変。「障がいのない人たちの講座に障がいがある人が入っていくのは大変。障がいのある方たちの講座に、面白そうだと知的障がいがない人が入っていくという形態を作っていくことも大事。大

	岡田座長 麻生委員 衛藤委員 岡田座長 社会教育課 (首藤) 佐藤委員 加藤委員 首藤 加藤委員 森山委員 加藤委員 清末委員	分大学のボランティア学生が終わったあとに「私たちは参加者だった」と言ったがそれはとても良いこと。 大分大学生涯学習講座で、特別支援学校の同窓会を通じて参加した方がいる。その保護者と話したら、なかなか知る機会もない。つながりを作っていきながら、今回特別支援学校の同窓会や地域の障がい者関係の施設、協議会の協力をいただいて実施できたが、そのようなつながりを作っていきながらコンソーシアムの形で議論して作っていくのがとても大事だと思った。 (まとめ) しくみをつくりながらプログラムも作っていただけたらバランスボールやゴム玉をつかう教室をしている。バランスボールにのって反り返るなどが最初にはできないけどできるようになった人もいる。競技の前の基礎のところがおざなりにされている気がする。今の学校教育では個人個人に対応できない。基本的な背骨をそるとか曲げるとかがあっての競技だと思う。スポーツに入っていく前にそのような教室も必要なのではないかな。基本的な運動能力や技能に目を向けていただければと思う。 特別支援学校の高等部の生徒に社会教育についての勉強をしてもらった。これはとても重要。学校教育を受けている段階から社会教育についての知識があるわけではないが、卒業したら学びたいことや学び先の探し方がわかって自分の計画を自分で立てることにいきつかなければいけない。 ありがとうございます。それでは、来年度の計画をお願いします。 <省略> ※別添資料参照 (意見) ソニー太陽では、障がいの有無に関係なく理科教室やプログラムをしているが、ポイントは、講師やスタッフも障がい者であること。来ている子供たちにも多様性の理解を深めてもらう。来年度は講師やスタッフも障がい者をどんどん入れていくことも考えると面白いのではないかなと思った。 (質問) モデル公民館 3 館は具体的に決まっているのか (回答) 現在調整中である。 (意見) 私たちのセンターでも障がいのある方もない方も利用されているが、何かトラブルがあったら、皆でどうやったらよいか考える。実際に使っている方々を取り込んで「どうやったら車いすの方が」「知覚障がいの方が」活用できるか、と。事務局や運営側だけでなく、公民館を利用している方々と一緒に考えていけたら良いのではないかな。公民館をよりよくするために皆さんのお知恵を貸してください、という感じで。味方になってもらうと良い。 モデル公民館がどういう形で取り組むかという形を尊重したい。千歳公民館は支援者の理解をどうつくっていくかということにも注力していただいた。加藤委員からもお話があったが、千歳以外の公民館にもぜひやってほしいし、五反田委員からあった新たな研修の提案などもしながら、来年度も力を入れていきたい。 県社協のほうに障がい種別の協議会もあり、ネットで研修やイベントも周知できるので、広報の手段として活用するなど一緒に考えていきたい。 特別支援学校で 2 月に講座をしたのだが、できたら早くしてほしい。特別支援学校の中でも「卒業後の生活」は扱う。働くことと家にいることが中心にな
14:40		
15:20		

	岡田委員	るので、何か余暇活動を作ってあげたいと思うが、社会にある色々なリソースを紹介することが教員の世界の中で十分な情報がない。具体的に「こういうがあるよ」と伝えられないので、公民館など参加できる状況であれば、それを紹介して、その年からでも動けるような、つながっていけるような話をしてくれるといいのかなと。できるだけ早い段階で説明を入れてくれると社会に出たあとの活動につながっていく、ぜひ伝えてもらいたい。 在学中に情報が入る、どこへいくと情報がある、一回やってみたことがある、という経験を持ってもらうということができればよい。高等部3年に限らず早い段階でやってもよい。 卒業後の生活に向けた学習をこれまでたくさん時間をとってこなかったの、そのあたりをこれからの子供たちを考えると必要かと思う。
	首藤	(回答) 卒業直前にお知らせしようと思ったのが浅慮だった。南石垣支援の3年生に絵手紙講座とフライングディスクをしたが、校長先生が「1, 2年生にもするといいよね」とおっしゃってくださった。実際千歳公民館は竹田支援学校と協力してやっているの、大分市でもほかのところでもやれたら
	松尾委員	(意見) ヨカたのはモデル公民館をねらいたい。そこがやりたいことと私たちがやりたいことが重なると、できる、たとえばITのことをやりたいならITの専門家が、スポーツならスタッフが、相談していただければいくらでもできると思う。3つをご相談いただきたい。清末先生がおっしゃっていただいたことを20数年前に附属(特別支援学校)で行った。子どもたちが困っているのをどうするか、ということで始めたのがうちの団体。ITを使って余暇活動をおこしたいと思っているので、うまく公民館を使わせていただきたい。ドローンなどは食いつき度が違うので、子どもたちと一緒にやりたい。松尾委員のようなコンサルタントをしてくださる方込みのほうがゼロから始めるより苦労が減るのでは、相談機能のような。
	衛藤委員	情報提供を受けたいときに、どこに相談すればよいかわからない。きちんとルールとして決めていくと良い。今のところ共有の窓口はネット上のHPだが、あれを見て行くのは難しい、そういう情報を受ける人を学校教育や公民館の中で決めていくと良い。
	森山委員	令和5年度の事業ということで、一応案という形ですが、県としてはまず3年というスパンをひとくぎりにして取り組みを考えていくつもりです。いただいたご意見をすべて網羅することは難しいかもしれませんが、相談しながらやっていきたい。
15:00	岡田座長	これから10分の休憩をします。
15:10	＜シンポジウム＞	テーマ「
～16:00		3グループに分けて協議
16:00		各グループ協議の内容を代表者が発表
	馬場総括 (事務局)	＜第1グループ＞ 「みんなが一緒にやる」講座と「それぞれの障がいごとの特性に合わせてやっていく」講座の両建てでやっていくことが必要ではないかとなった。 指導者・支援者の確保が欠かせない。大学生のサークル活動に協力してもらい、既存の公民館の講師にある程度の専門性を身につけていただくことも必要

15:45	岡田委員 太郎良 馬場総括 <開会行事> 森山課長	だろう。どこにどんな講座や取り組みがあるということについては、誰かコーディネーター、コンシュルジュといった「振り分ける人」が必要だということが改めて出た。我々行政職員も含めて障がいのある人の取り組みに対する理解が必要だろうということや、今後どう進めていくか長期的なビジョンを明らかにしていくことも必要だ。 <第2グループ> ボランティアで手出しでずっとやって後継者も見つからないということでは厳しい。県社協で夏休みボランティアなど募集していたり、あすぴあの運営にもボランティアがかなりかかわっていたりと、実際関わってもらおうとボランティアの充実感とか意義が伝わるのでどうやったら「1回やってもらうのか」ということについて考え工夫してもらう必要があるのではないか。行政で予算をつけるとか、事業をするという部分、いくらかでも生業につながる収入につながるような仕組みを地域として考える必要がある。ある程度研修を行って資格を出して、資格をもって行ったことにはポイントをつけて何か表彰されるとかそういう仕組みが必要。個人で一本釣りして集めるのは限界があるので、組織との連携も必要。依頼内容を明確にして依頼する。企画運営側の力量を深める研修として、コーディネートなどを学べる機会も整備すると良い。 <第3グループ> 公民館職員の研修が必要だということと、DET研修で、当事者しかわからないことを共通理解しながら研修を深めていくことが大事なのではないか。 障がいのある人もない人も最初からまぜた状態で研修をするのも良い。実際に大分市ではそういう講座を前期と後期に分けて取り組んでいく。ヨカたのさんの「ごちゃまぜサッカー」では、ツイッターやYouTubeを駆使したら、参加者が前回の10人から40人になった。SNSを使って投げかけをするのは有効。持続可能にするためには研修だけではなく周知理解を図っていくことが大事だ。 事務局としてはいただいたたくさんの意見を集約して、来年度の取り組みに生かしていきたい。 熱心なご協議をいただきありがとうございました。 次年度の取り組みに対しても様々な立場からご意見をいただきました。 当初、どうなるのかと個人的にも思ったのですが、冒頭県の保健福祉部局の関さんから話があったように、縦割り行政の中で、教育と福祉がこうやって接点をもつといういいつながりができたと、大学、学校、様々な機関や団体とコンソーシアムを通じてつながりが作れたことが一番大きな成果だと思う。事業とは関係なく、コンソーシアムをずっと続けていくことが大分県のためになるのではと考えている。市町村の教育や福祉につながりが生まれるよう支援をしていく必要を感じている。 1年間大変お世話になりました。 以上をもちまして、コンソーシアム会議を終了いたします。
-------	--	--

